

液流入障害の改善にもかかわらず、術後左心機能の改善に比し、右心機能は改善を認めなかった。以上、本法は心臓腫瘍の存在診断と同時に血行動態の把握に有用な情報をもたらす、特に術前後の経過観察に有用と考えた。

#### 5. Binswanger 病の $^{123}\text{I}$ -IMP 脳血流シンチ

小田野幾雄 樋口 正一 清野 泰之  
酒井 邦夫 (新潟大・放)  
小山 晃 渥美 哲至 (同・脳研・神内)

Binswanger 病は、50 歳代以後に発症する進行性の精神機能低下、失語、片麻痺を主訴とする脳血管性痴呆の一つである。病理学的には大脳白質の広範囲な脱髄と多発小梗塞巣がみられるが、皮質と皮質下の弓状線維はほとんど障害されない。今回、われわれは本症と思われる 75 歳男性の IMP 脳血流シンチおよび脳槽シンチを施行し、その所見について報告した。

IMP 脳血流 image では大脳皮質の RI 分布は比較的均等で局所的な低血流域は少ないが、mean CBF は 38 ml/100 g 脳/min と全体に低下していた。V-P シャントが施行され、症状の軽快がみられたが、これは 35% の mean CBF の増加として証明された。びまん性脳血管障害の評価には、IMP 脳血流 image のみでは不十分で、CBF 値による評価が必要である。

#### 6. $^{123}\text{I}$ -IMP シンチグラフィが有用であった OPCA の 2 例

長瀬 雅則 入江 健夫 宇都宮正範  
森 豊 川上 憲司 (慈恵医大・放)

オリブ橋小脳萎縮症 (Olivo-ponto-cerebellar atrophy: OPCA) は脊髄小脳変性症の一つとして知られている。今回、OPCA と診断された 2 例に対し、 $^{123}\text{I}$ -IMP による脳血流シンチグラフィを施行し有用な情報が得られたので報告する。方法は  $^{123}\text{I}$ -IMP 約 3 mCi を静注し、約 20 分後から Early image を、約 240 分後から Delayed image を撮像した。X 線 CT 上では 2 例ともに小脳の萎縮が認められたが、 $^{123}\text{I}$ -IMP シンチグラフィでは Early および Delayed image の両方で小脳への著しい集積の低下を認めた。よって  $^{123}\text{I}$ -IMP による脳血流シンチ

グラフィは OPCA のような脊髄小脳変性症においても有用な検査法と考えられる。

#### 7. 脳腫瘍症例における $^{201}\text{Tl}$ , $^{123}\text{I}$ -IMP SPECT と $^{18}\text{F}$ -FDG PET 所見の比較

館野 円 井上登美夫 織内 昇  
富吉 勝美 住田 康豊 佐々木康人  
(群馬大・核)  
柴崎 尚 (同・脳外)  
早川 和重 石原十三夫 新部 英男  
(同・放)

脳腫瘍症例における  $^{201}\text{Tl}$  chloride,  $^{123}\text{I}$ -IMP SPECT および  $^{18}\text{F}$ -FDG PET 所見を比較し、その臨床的有用性を検討した。SPECT は  $^{123}\text{I}$ -IMP 3 mCi 静注 20 分後よりリング型 SPECT 装置にて 1 スライス約 1 M counts の条件で撮像し、さらに  $^{201}\text{Tl}$  chloride 3 mCi を静注 20 分後に同一スライス面の SPECT を撮像した。PET は  $^{18}\text{F}$ -FDG 8 mCi を静注し、60 分後に撮像した。対象は、頭蓋内腫瘍性病変を有する 16 例である。SPECT は全例に、PET は 16 例中 12 例に施行した。腫瘍への集積を視覚的に検討した結果、 $^{201}\text{Tl}$  SPECT では 12/16 (75%)、 $^{123}\text{I}$ -IMP SPECT は 2/16 (12.5%)、 $^{18}\text{F}$ -FDG PET は 9/12 (75%) に腫瘍への集積を認めた。 $^{201}\text{Tl}$  SPECT は脳腫瘍の検出に有用であり、 $^{123}\text{I}$ -IMP SPECT は腫瘍周囲皮質の mass effect の評価に有用と思われる。また両者を合わせて施行することにより、 $^{18}\text{F}$ -FDG PET と同等の情報が得られる可能性が示唆された。

#### 8. 変形性股関節症 (変股症) の dynamic and static bone scan

小泉 潔 内山 暁 荒木 力  
日原 敏彦 尾形 均 門澤 秀一  
可知 謙治 松迫 正樹 (山梨医大・放)  
中島 育昌 (同・整外)

変股症の dynamic, static bone scan 所見を分類し、骨 X-P 所見や疼痛の種類や程度と比較検討した。

dynamic scan として、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$  MDP 静注後 5 秒ごと 12 枚の RI アンギオ、引き続き 1 分ごと 12 枚の早期連続像を撮像し、static scan として 3 時間後スポット像を撮った。